



Title	視覚と近代中国文学者 : 横断する幻燈・絵画・映画 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	余, 迅
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12927号
Issue Date	2017-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68168
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Xun_Yu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 余 迅

学位論文題名

視覚と近代中国文学者 ― 横断する幻燈・絵画・映画

・本論文の観点と方法

近代中国文学の代表格である魯迅にまつわる諸エピソードのひとつに、「幻燈事件」と呼ばれるものがある。日本留学中、医学を専攻していた魯迅は教室で日露戦争関連の場面を映す幻燈を見せられたが、ロシア軍のスパイを働いた中国人が銃殺されようとする場面で、まわりにいる野次馬の中国人が興奮して騒いでいるのを目にした。この衝撃的な体験をきっかけに、魯迅は国民の体の病気を治療するよりも国民の精神を改造することの重大さを痛感し、医学から文学へと転向した。文学史において一般にこのように記述されている「幻燈事件」を、近現代中国文学・文化の研究分野において最も進んでいるとされる北米の研究を代表する研究者のひとりであるレイ・チョウは、一文学者をめぐる医学から文学への転向を語るものだけでなく、近代中国における文学と視覚映像との遭遇を象徴する事件でもあると見なし、中国近代文学・文化における視覚の果たす役割を強調する。本論文は、このような立脚点を踏襲しながらも、近代中国文学における視覚の存在およびその役割を指摘するに止まらず、近代中国の文学者が具体的にどのような形で視覚的なものに関わっていたか、また、このことによって文学者の文学活動に、ひいてはその文学作品の作風にどのような変化をもたらしたかを具体的に考察し、幻燈、絵画、映画という、視覚に関わる三つのジャンルにわたって、文献資料を緻密に調査したうえ、複数の作家における文学と視覚の相関を明らかにしようとする。

・本論文の内容

本論文は、幻燈、絵画、映画という三部構成をとっており、それぞれの部に三つの章を設け、視覚に関わる事象や文学者を取り上げている。

「幻燈」と題された第Ⅰ部は三つの事象を取り扱う。第一章で焦点を当てたのは、近代における西洋の光学装置と視覚理論の伝来、およびそれに伴う近代中国における視覚教育の普及である。17世紀に、「三稜鏡」や「カメラ・オブスクラ」、「幻燈機」などの光学装置が西洋の宣教師によって中国へもたらされた。珍しい舶来品として上層階級に秘蔵されるのが常であったが、一部の知識人はいち早くこれらの新しい光学装置に反応を示した。明清期の李漁の小説「夏宜楼」には、他人の生活を覗き見る道具としての望遠鏡がすでに登場している。清の鄭復光による『鏡鏡詮癡』には、光学装置に関するイラスト入りの説明なども多く見られる。西洋の視覚理論が徐々に漢訳され（『遠鏡説』）、中国知識人による視覚知識についての解説（『物理小識』）も現れ、さらには、科挙の受験準備のための伝統的教育と一線を画す、実技を重視する近代的な教育機関（格致書院）を通じて、視覚の教育は社会一般へと広がっていく。本章は、それらの事象に関する記述を通して、近代中国における西洋の光学装置・視覚理論の受容の歴史的な展開・変遷を概観し、近代中国における視覚言説の生成過程を明らかにする。

第二章では、舶来品としての視覚装置のひとつ、幻燈を取り扱う。科学的発明である多くの視覚装置の中からとりわけ幻燈を特権的に検討したのは、それが娯楽性あるいは見世物としての性格を

有するからであるが、本章は、幻燈が中国へ導入される経緯や、清代の書物に見られる幻燈に関する記述、『申報』の記事から確認される初期の幻燈興行活動の記録などを確認・整理し、さらには、「影戲」、「射影機」、「電戲」、「西洋影戲」、「影灯」といった複数の名称で呼ばれていた幻燈と、後に登場する映画との錯綜する歴史的な関わりを考察しつつ、文学と視覚の関わりという本論の中心的テーマからして格段に注目するに値する幻燈をめぐって、文献資料に基づく史的調査・検証を行なう。

第三章では、「幻燈事件」を経験する近代中国の代表的な文学者・魯迅の視覚体験を検討する。「幻燈事件」に関する多くの先行研究をまとめたうえで、本章はレイ・チョウらによる指摘に一定の同調を示しつつ、魯迅と幻燈や映画といった視覚的なものとの関わりについて慎重に検討していく。日本留学時代から上海時代までの各活動時期の映像・映画体験を整理し、「西洋鏡」、写真、映画についての魯迅の記述を精査したうえ、視覚や映画に対する魯迅の言説をまとめる。また、魯迅の作品そのものに関して、「斬首」、「観客（[看客]）モデル」を取り上げ、魯迅文学と視覚との遭遇の問題として考察する。末尾には、先行研究を参考しつつ魯迅の日記やエッセイを点検して作成された魯迅が鑑賞した映画のリストが付されている。

第Ⅱ部の「絵画」では、文学者葉靈鳳、小説家徐卓呆、連環漫画『王先生』を文学と視覚との関わりにおいてそれぞれ取り扱う。第四章は、文学史においては批判的に叙述されることの多い葉靈鳳に関する考察に当てられる。本章の前半では、「葉魯論争」にまつわる諸言説を整理し、同作家に対する評価の変遷をまとめたうえ、従来の文学史に流通していた葉靈鳳にまつわる「虚像」が生まれた原因を究明する。後半では、中国における蔭谷虹児・ピアズリーの受容に関連させつつ、葉靈鳳小説における絵画的要素に着目し、視覚イメージを小説に導入する葉靈鳳の作品について具体的に考察する。

第五章では、『申報』に掲載された連載漫画『改造博士』を取り上げ、まず中国初期漫画の特徴的な点に触れつつ、『改造博士』に頻出する「機械と人間」のテーマや、滑稽さを醸し出すその作風を考察する。そのかわり、本章は『改造博士』の作成チームの一員である小説家・映画人の徐卓呆の活動に注目する。小説家として「滑稽小説」を発表するいっぽう、映画人として中国初期の映画論『影戲学』を執筆し、みずから設立した映画会社による「滑稽電影」を製作する徐卓呆が、どのように「滑稽漫画」「滑稽小説」「滑稽電影」を実践したかを史的に究明する。

第六章では、中国漫画史において連載期間の最も長い連環漫画『王先生』を研究対象とする。同作品がジョージ・マクマナスの『親爺教育』から影響を受けたことを確認したうえ、『王先生』の表現上の特徴としての「運動性」に焦点を絞り、漫画における映画的手法、および文字と視覚的ファクターとの競合の相貌について細かな検討を加える。

つづく第Ⅲ部は文学と映画の関わりに当てられる。まず第七章では、中国初期の「シネフィル」とされる文学者の周瘦鵬を取り扱う。周瘦鵬は、作家がサイレント映画を鑑賞した後、映画の粗筋に基づいて創作する小説である「影戲小説」をも複数執筆しているが、本章はとりわけ周瘦鵬の執筆する「影戲小説」のひとつである「旁貝城之末日」に注目し、同作家に見られる文学と映画の融合、また、短命な存在であった同ジャンルの限界について検討する。

第八章では、中国「新感覚派」文学の中心人物のひとりである劉呐鷗の映画作品、『カメラを持つ男』を分析する。同時代のソ連のジガ・ヴェルトフによる『カメラを持った男』から影響を受けて作られた劉呐鷗の同作品をめぐって、テーマとしての「都市」、「女」の表象、撮影者と被写体との間に見られるまなざしの関係性、しばしば乗り物にカメラを乗せるといった、ヴェルトフの「映画眼」を意識した表現などに着目しつつ具体的な考察を試みる。

第九章では、古典ハリウッド映画において極めて重要な存在であったエルンスト・ルビッチと民国期の映画人、または映画にも携わっていた文学者との関わりについて考察するものである。洪深・桑弧・張愛玲をピックアップし、民国期の映画人が「ルビッチ・タッチ」に染まりながら、いかに彼ら独自の映画スタイルを発展させたかを探索する。